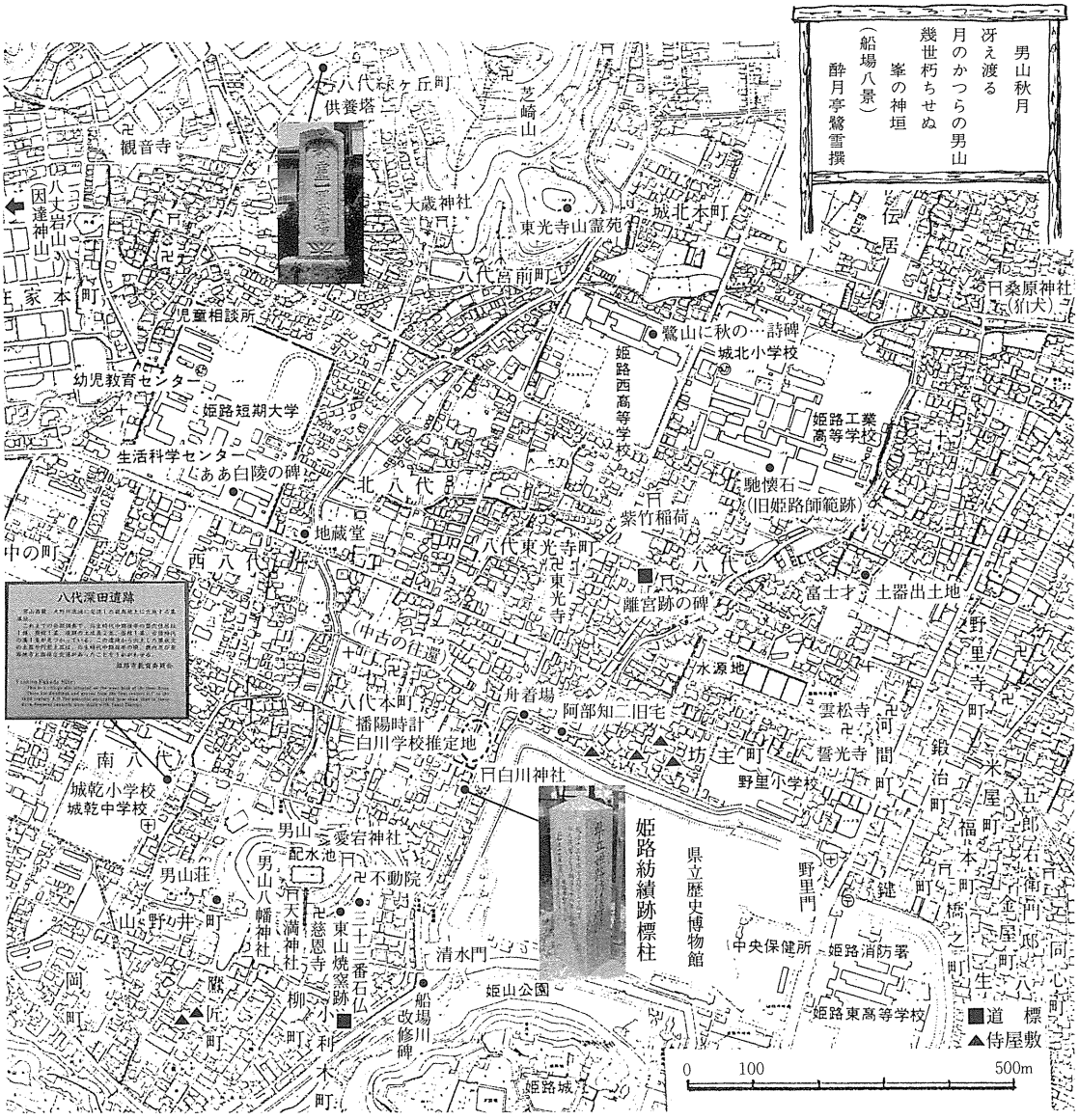
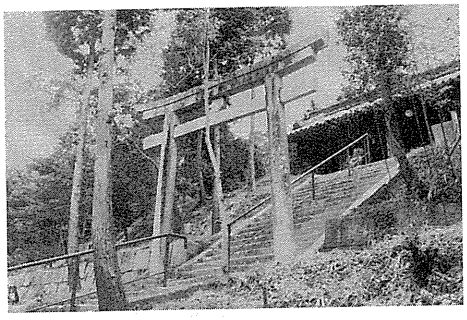
文化財見学シリーズ19　　姫路市教育委員会文化財課（昭和62年8月31日発行）
（平成9年1月　再版）

『男山周辺』をたずねて



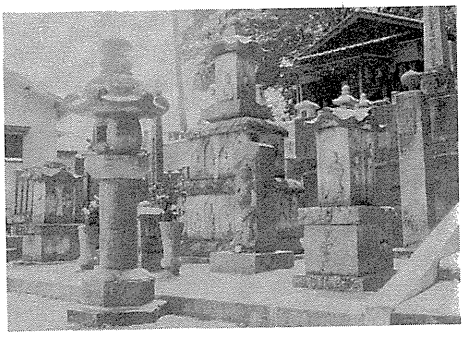
男山は『播磨国風土記』伊和の項にでてくる「筥丘（はこおか）」だとされている。その話は、大汝命（おおなむちのみこと）がたけだけしい火明命（ほあかりのみこと）を因達神山（いだてかみやま）におきざりにして船を出したところ、火明命がおこって風波をおこした。大汝命の船が難破し、積荷の蚕子（ひめ）の流れついた所が日女道丘（ひめじ）（姫山）、箱のついた所が筥丘だという。因達神山は今の八丈岩山（はちじょうがんざん）で、因達里（いだてのさと）はそれより東方だと考えられている。男山は「飾磨のかち染」の伝説にも関係がある。今の自衛隊内にあった長者屋敷から難をのがれて旅の男が逃げてきた山を男山、いっしょの女が逃げてきた山を姫山と名付けられたという。八幡宮の石鳥居には雄徳山の字が見える。いま頂上は上水道の配水池になっているが、明治27年ごろ箱式石棺が発見された。

見野廃寺から移した塔の心礎



榊原政邦寄進の石鳥居
柱に武運長久を祈る願文がほってある。

「火を守る愛宕の山の焼物師
嵐吹く日は心許さじ」
（船場八景）船場連合自治会の設置



西国三十三番石仏（不動院）
江戸・大阪の商人も造立に合力している。石仏群としては珍しいもの。

姫路市男山荘（山野井町）
浜本八治郎が13年かけて昭和４年に完成した大邸宅。庭の手洗石は、見野廃寺（四郷町）の塔心礎が移されてきたもの。

八幡神社（山野井町・男山中腹）
南北朝時代にはじめて姫山に城を築いた赤松貞範（さだのり）が創立し、戦国時代に赤松政則が、江戸初期に池田輝政、中期には榊原政邦がそれぞれ再建したという。石鳥居は延宝７年（1679）に松平直矩（なおのり）、正徳６年（1716）に榊原政邦が寄進した２基が残っている。昭和12年に旧制姫路高等学校が建てた碑などもある。参道脇には千姫が信仰したという天満神社がある。

雄　徳　青　松（雄徳山八景）　　榊原政邦
「仰げなを恵は高し男山 峯にさかゆく 松のみどりは」

愛宕（あたご）神社（山野井町・不動院奥）
防火の神。地蔵と習合して勝軍地蔵をまつる。京の愛宕にちなみ、姫路の西北を守る神としても早くから信仰されたようで、元禄14年（1701）の手洗石が不動院の境内にある。享保６年（1721）の石鳥居、「播陽府廿四社一」とほった石標もある。

東山（とうざん）焼窯跡（山野井町・不動院境内）
東山焼は糸引地区東山（ひがしやま）に始まったが、河合寸翁が姫路藩のお庭焼にとりたててから男山へ移った。窯は不動院墓地の南にあったようで、火で変色した窯壁を用いた石垣がある。

池田弥七の墓（山野井町・愛宕神社参道脇）
弥七は東山焼窯元の棟梁であったこともあり、のち新案コンロを製造し、弥七コンロの名で好評をえ、販路も広く昭和になっても需要があった。明治10年没。

西国三十三番石仏（山野井町・不動院墓地）
寛政７年（1795年）に造立したもの。中央主塔に三十三霊場の観音石仏を３段に配し、主塔の四隅に四天王、前方左右の立石に帝釈天をはじめ日天・月天など天部の諸像を半肉彫で配し、曼陀羅空間を作り上げている。造立者の中に書写山の僧も多数名をつらねている。

慈恩寺の絵馬（山野井町）
地蔵堂に地獄絵の絵馬がある。地蔵は寛政６年のもの。

兵庫県立姫路紡績所（八代本町１丁目）
職を失なった士族を助け、産業を盛んにするために国の補助を得て県が建てた模範工場。水車だけで運転する予定であったが蒸気機関も備えた。しかし、欠損を重ね明治21年から民営の姫路紡績株式会社となったが、明治32年11月７日出火して焼失した。

白川学校（八代本町１丁目）　明治５年の学制によりできた小学校。跡地は民家になっている。

御用水車（八代本町１丁目）

姫路藩が補助して宝暦12年（1762）から運転。米の粉、菜種油、綿実油を絞った。原料は藩内のものに、製品は藩士用に限っていたようである。その場所ははっきりしないが、用水路は今も見られる。

大日本帝国播陽時計製造会社（八代本町１丁目）

明治21年設立。水車で器械を動かし、士族も従事したが数年で閉鎖した。

中古の往還（八代本町１丁目と２丁目の境界道）

古代の山陽道は増位・広嶺の山すそを通っていたが、中世には野里門～八代～辻井のルートであったと考えられている。この道は大正時代までは重要路であった。

船場川の舟着場（八代本町２丁目）

高瀬舟は船場川の上流まで上下していたという。舟着場は洗場も兼ねていたが、今は両岸が改修され、ほかには見られなくなった。

伝伏見天皇離宮址の碑（八代御茶屋町）

鎌倉時代に伏見天皇がこの地に東光寺を建て、離宮としていたところだと寺記にいう。昭和５年兵庫県と姫路市が宮址保存、霊域顕彰のための碑を建てている。

御茶屋跡（八代御茶屋町）

池田輝政はすたれていた東光寺を今の地に再建し、その跡に別邸を建てた。歴代城主もこれを引継いで休養に用いていたが、酒井家になって廃止した。昭和初期まで池や土手の跡が見られた。

隣　寺　暁　鐘（八代八景）　　榊原忠次

「暁のねざめを誘う鐘の音は　ちかきもとおく行く心かな」

子安地蔵（河間（こばさま）町・誓光寺）

貞治２年（1363）の文字がある石棺底石に刻んだ石地蔵。清盛の娘建礼門院の安産を願って全国へ配した66体のうちの一つだといわれ、いつの頃からか子安地蔵とよばれるようになった。地蔵堂の前にはくりぬき石棺、墓地の中には六面に地蔵を彫った石幢、境内には庚申（こうしん）堂がある。

雲松寺山門扁額（河間町・雲松寺）

江戸初期、隠元（いんげん）とともに来日した明の禅僧木庵（もくあん）の書で「鶴棲（かくせい）山」。雲松寺の開山実伝の依頼で書いたもの。境内には享保５年（1720）の六十六部供養仏の碑がある。

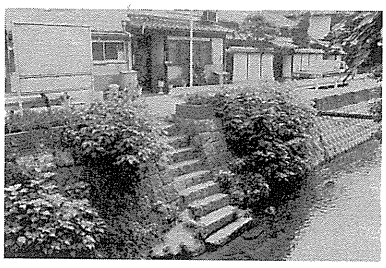
松平直矩寄進の石鳥居（八代宮前町・大歳神社）

延宝８年のもの。「姫路城主従四位下侍従兼大和守源朝臣直矩」の文字がある。境内の井戸の井戸ガマチは、一石を彫り抜いたみごとな手法のもの。

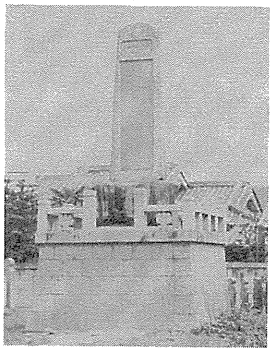
ああ白陵の碑（姫路短期大学内）

大正12年に設立された旧制姫路高等学校の寮歌が刻んである。学制改革により昭和25年廃校となったが、校舎は神戸大学姫路分校、県立姫路短大へとひきつがれている。全国に25校あった旧制高等学校のうち、校舎が残っているのは姫路と松本だけである。

御用水車の用水路（八代御茶屋町）

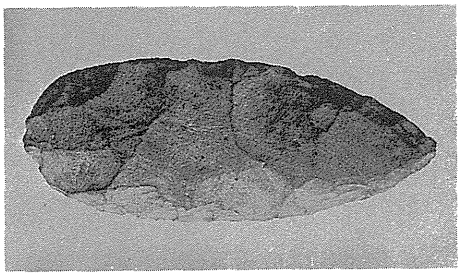


船場川の舟着場
この上の道が中古の往還にあたるのだといわれている。



離宮跡の碑
離宮の考証が長い漢文で書かれている。

誓光寺の子安地蔵



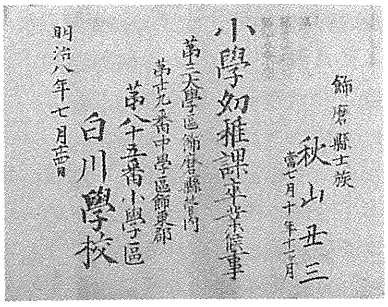
八代芝崎山採集の石器　17.5cmもある大きな尖頭器。１万年以上も前に、この山でもえものを追っていたのであろう。

富士才遺跡出土の弥生土器
壺をのせる台。
ある人が地下室をつくるため掘下げたところ、地下約一九〇cmから出土した。

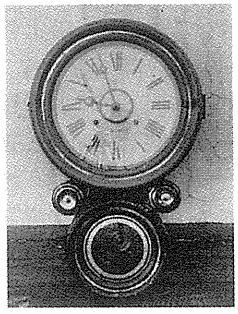
芝崎山のハニワ列
戦後まもないころ砂防工事で削られた山の斜面で見つかった。

八代村の六地蔵（八代宮前町・東光寺山霊苑）
正徳５年（1715）の銘がある。霊苑造成により整備された。１体は少しはなれて立っている。

観音寺の石地蔵
（新在家本町四丁目）
享保八年（一七二三）のもの。背中に大きく変形十字がある。隠れキリシタン地蔵ともいわれる。

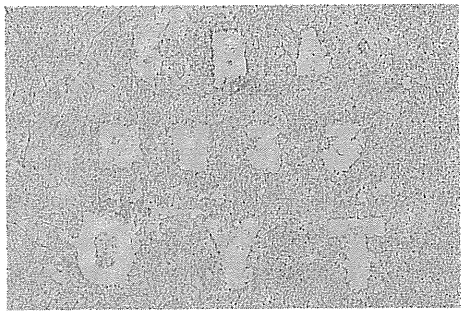


白川学校幼稚課卒業証
この人は10才11か月のとき卒業している。



播　陽　時　計
振子室に英語で調整のしかたが書いてある。

旧制姫路高等学校の講堂（現姫路短大）
本館と講堂が残っている。左下の碑が「ああ白陵の碑」。



県立姫路紡績のレンガの刻印
（増田重信氏提供）
磨耗がひどくて判読困難

■編集　矢内　澄　（姫路市文化財嘱託調査員
姫路市立老人大学校好古学園講師）